平成21年 5月29日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17251011
 研究課題名（和文）台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究 「日本」認識をめぐって
 研究課題名（英文）A Historical Anthropology Approach to Colonialism in Taiwan: Perceptions of Japan
 研究代表者
 植野 弘子（UENO HIROKO）
 東洋大学・社会学部・教授
 研究者番号：40183016

研究成果の概要：

台湾における日本統治期およびポストコロニアル期を通して、台湾の人々が日本のもたらした制度・文化をいかに認識し、それを利用・操作して生活世界を構築してきたのを、文化人類学的・歴史学的手法によって明らかにした。語られる記憶の現在の意味、台湾の植民地近代、台湾にとっての中華と日本といった諸課題を検討し、さらに台湾の植民地主義と他地域との比較を行った。これによって、本科学研究は、「対統治者」という観点を脱して、植民地に生きる人々の認識や行為を具体的に捉え得たのである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	8,200,000	2,460,000	10,660,000
2006年度	6,600,000	1,980,000	8,580,000
2007年度	7,200,000	2,160,000	9,360,000
2008年度	8,700,000	2,610,000	11,310,000
年度			
総計	30,700,000	9,210,000	39,910,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学 / 文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学・歴史人類学・植民地主義・台湾・日本・中華・歴史認識・異文化接触

1. 研究開始当初の背景

従来の台湾の植民地主義に関する研究においては、日本植民地統治の抑圧的な支配とそれに対する服従あるいは抵抗といった枠組で分析されてきた。また一方で、日本統治は、台湾を近代化させたとする分析がなされてきた。つまり、台湾の人々の営為を日本に対する反応のあり方としてのみ捉えてきた。しかし、実際には、持ち込まれた日本的な制度や文化は、服従あるいは抵抗する対象としての

み存在するわけではなかった。また日本による統治の中身を詳細に見ていくと、地域、性別、階層、民族（漢人と原住民、閩南系と客家系など）などの違いによって、日本の持ち込んだ制度や文化は多様な側面を持っており、これに対する実証的な研究が求められていた。

また、人文・社会科学的領域で常に問題視される、口述資料及び雑誌・新聞記事、私文書（日記、回顧録など）などの資料としての客観性、並びにそれらを用いて研究するため

の学術的な方法論については、十分な論議が行われておらず、文字史料を扱う歴史学者と参与観察や口述資料を扱う人類学者とが共同で研究を行うことが必要であった。

人類学をはじめとし、人文社会科学的研究全体としては、西洋の植民地であった地域における植民地認識に対する研究実践は、蓄積されてきている。しかし、旧日本植民地を対象とする人類学的研究は、理論面においても、実証研究においてもいまだ十分なものではなかった。特に、従前の研究は、台湾社会に残る植民地統治の遺産を指摘することによって、逆に台湾を植民地主義的な視線で捉える陥穽に陥ってきたという問題点があり、新たな視点での研究が待たれていた。

2. 研究の目的

上記の研究の背景をふまえ、本科学研究では、以下のような研究の目的を設定した。

(1) 日本による台湾植民地統治の功罪や効果のみを問うという従来の硬直した歴史観から脱し、「日本」を生活の一部として生きてきた台湾の人々のリアリティに迫る。つまり、日本によって導入された日本語や日本のあるいは近代的な観念が、台湾社会を一方的に規定する植民地経験ではなく、台湾の人々の便宜にあわせて適宜読みかえられて言及される植民地経験として、現在の台湾社会においても大きな意味を持っていることを明示していく。

(2) 従来、歴史学では補足的資料として扱われてきた口述資料及び雑誌・新聞記事、私文書に新たな分析上の価値を見出し、過去の生活世界を描き出す新たな方法論を提示する。

(3) 旧日本植民地に関する人類学的研究成果を蓄積すべく、脱二項対立的観念を持った植民地主義研究を援用しつつ、台湾の人びとの生活実践の場に接近し、「日本」の姿を捉えていく。

3. 研究の方法

本研究では、文化人類学的な臨地調査、ライフヒストリーの聞き取り、それらと歴史的な文献史料の分析との接合を行った。また、調査研究の成果を検討すべく、科研メンバー以外の報告者も交えて、研究会を行った。さらに、成果公開のために、2回のシンポジウムを開催した。

4. 研究成果

先述の目的・方法に従って行われた本科学研究の成果と今後の展望と課題は、以下の6点に大別される。

(1) 再構築される「日本」

台湾の人々の日本に対する語りを聞くことは、過去の再現を目指すのではなく、今、台湾において「日本」がどのような意味をもっているかを探ることであり、そこには、一様ではない「日本」、時代とともに意味づけを変えられる「日本」の姿が浮かび上がってきた。

文化アイデンティティと「日本」認識

日本語世代とその次世代へのインタビュー調査の分析によれば、日本人へのイメージは、日本統治時代に受けた教育の種類によって大きく異なる。日本人へ好意を感じる度合いは台湾人児童が通う台湾公学校卒で、高等教育を受けなかった人びとの方が強く、高学歴層の場合は当時の差別的な待遇についての不満が大きくなる。ただ、高学歴者ほど彼らの文化的なアイデンティティに日本文化が大きな影響を与えている。

日本語世代の人々が語る「日本」とは、過ぎ去ってしまった「ある時代」の単なるノスタルジーではなく、激変した戦後の台湾の社会状況に対する強い不満を表示するとともに、自らの文化的アイデンティティを示すものといえる。しかしその度合いは社会階層によって大きな違いがあり、植民地体験やその記憶を単純化することはできない。

記憶の歴史化

植民地時代の経験や体験が歴史へとその質を変化させている点に注目して、現在の台湾の人々が持つ「日本」認識に関する分析が行われた。台湾東部海岸で日本統治初期に起こったある抗日事件をめぐり、地方史家や各集落および行政機関などのさまざまな主体が、それぞれ記録文書を作成し、さらにかつての「神社」を再建し公園化するなどして、記憶の歴史化を進めている。地域や集落独自の、あるいは自分たちの歴史として、日本統治期の記憶がもつ現在の意味が明確にされた。

台湾の日本人とポストコロニアルの意味

台湾の植民地主義研究の中で、「植民者」としての日本人がいかに台湾で生きてきたのか、そして特に引き揚げ後いかに「台湾」との関係を持ち続けたのかについては、これまでほとんど研究が行われてこなかった。本科学研究では、こうした側面にも焦点をあて、以下の点について資料収集および分析を行った。

第一に、植民地期の台湾での生活の様子、言語使用状況、特に台湾語の使用、戦時中の生活状況、疎開体験、終戦後に遭遇した時代の変化、そして引き揚げ時の状況である。第二に、日本に引き揚げてからの祖国での生活への適応状況である。第三に、植民地期に形成された関係性の維持と、引き揚げ後の交流状況、同窓会・同郷会・戦友会の様子である。第四に、台湾で戒厳令が解かれてからの台湾に対する思いの変化である。

これまで、台湾の人々からみてきた植民地

の姿に、植民地者である日本人の視点を加えることによって、植民地の生活世界をより包括的にとらえることが可能になってきた。

台湾仏教界と日本

日本統治期には、日本仏教の各宗派が寺院や布教所を台湾に建立した。これらは戦後に接收されるが、その基準は「日本」的であるに依った。接收の過程で「日本仏教」に対する認識が、「再生」されていく可能性もあったことが指摘された。また、現在に至るまで宗教関連施設として残存している旧日本系仏教寺院の中には、戦後、盛んに日本仏教界との交流を推進する施設が少なからずある。交流の中では、その施設が「日本」的なものとして扱われていく。

戦後、日台間の仏教交流においては、あえて「日本仏教」と「日本」が強調され、「中国仏教」との差異が明確化された。それらは、当初、接收や脱日本化といった文脈の中で形成されたが、その後、「反脱日本化」の要素として、その結び付きを強調されることもあった。

(2) 「日本」と植民地の「近代」

植民地期は「近代化」の時代であった。植民地に宗主国がもたらす制度・文化・技術は、進歩したものとして植民地に導入される。しかし、植民地の人々は、そもそもは文化的には「後進国」とされていた日本が、明治維新以降に羽織った「近代化」をいかに捉えていたのであろうか。台湾における「日本」認識を、「近代」という視点から考察した成果は以下の通りである。

生業レベルでの近代「日本」

台湾東部の漁業にみられる「日本」を、植民統治末期から戦後初期にかけての近代的漁業技術の展開と、そこにおける日本人漁民の働きと台湾住民との関係、さらに植民統治期の沖縄出身者を含めた日本人漁民の台湾への移住および移動と生活について、調査研究および分析が行われた。

漁民に対するインタビューと総督府などの植民地行政機関の文書および水産関連雑誌の記事を資料として用い、台湾東海岸の「移民村」の住人（公的移民と自由移民）の移住プロセスや、彼らの用いる漁法に代表される技術および関連する知識全般（＝近代的な漁業）がいかに展開していったのかについてのデータが収集・分析されている。

この二つの課題は、蓄積の少ない台湾社会の漁業領研究の一次資料収集という意味があると同時に、被支配者側の持つより複雑で一見矛盾する面をも入れて植民地主義と近代性の関連を問う「植民地近代（colonial modernity）」論による分析がなされている。

女性たちの「近代」

日本統治期に起こった大きな変化の一つは、

女性が家庭外での教育を受ける機会を得たことであった。特に、高等女学校教育は、ごく一部の上層階層、のちには中層階層をも含む女性を対象にしたものであったが、伝統的な「婦徳」とともに新たな「近代」的観念を教える教育であった。高等女学校に通ったエリート女性たちを、日本統治の象徴的な存在としてとらえ、彼女たちのライフヒストリー資料から、以下のような分析がなされている。

高等女学校に学んだ女性たちが育った家庭の生活は、台湾の慣習に依っている。そして、学校では、日本の作法を習い、日本の年中行事が行われ、衛生・儉約といった観念が教えられる。学校と家庭は乖離したものであった。彼女たちの学校教育で得たものは、結婚後に営む家庭生活において意味をもったと言える。「日本教育」を受けた女性には肯定的な評価がなされる。それは、伝統的な女性の婦徳を心得て、そして近代的な知識を得たものとしての評価である。また、彼女たちは、優位な社会階層と近代的な家族の象徴であった。その家庭は、伝統的価値とモダンな生活スタイルとが混在しており、台湾の家族像の一つのモデルといえよう。

客家と「近代」日本

台湾・本省人の少数派である「客家民系」にみられる「日本」認識の調査・検討から、少数派特有ともいえるべき「外来・優勢文化の積極的受容・利用」がみられる。人口比では劣勢な客家民系は、外来政権・日本が強制する日本語・教育を、むしろ積極的に受容することにより、植民地台湾に作り上げられた「近代的社会体制」の中で、より上位の地位を獲得するツールとして、「日本」を取り入れたのである。

しかし、ここでいう「日本」は伝統的なものを指すのではなく、また、現実の存在としての「日本・日本人」でもない。客家民系の「日本」は、伝統から切り離された、明治以降の日本が作り上げた、近代化を意味するそれであった。

以上の「近代化」に関わる課題は、「近代化を意味する日本」がいかなるものであったかを、内地で展開された「近代化」を踏まえた上での再検討が必要となる。

(3) 原住民族の旧慣と「近代」日本

日本が植民地統治のなかで、「近代」日本、あるいは「文明化」した日本像を明確に植え付けようとしたのは、台湾の先住民族「原住民族」に対する施政であったといえよう。以下は、そうした原住民族に特有の課題に注目した研究の成果である。

旧慣の否定と生活の近代化

日本が台湾を統治した50年間を通じて、原住民族に対する統治政策は「理蕃政策」と呼ばれ、漢族の場合とは質的に大きく異なる性

格を持っていた。「理蕃政策」の一環として、台湾総督府による原住民族の旧慣の否定については、1930年代の動向が重要である。当時は一連の旧慣に対して「陋習」という語が盛んに使われた。具体的には、刺墨(イレズミ)、穿耳、欠歯のような身体変工、屋内埋葬、嬰兒殺しなどの生活慣習を指しているが、それらの禁止や改善指導にあたった行政官ごとに何を「陋習」と見なしたのかは必ずしも一様ではない。また、そうした旧慣に介入するときの理由づけ、慣習を廃棄させるための方法、そして原住民族側の反応、変化・消滅の過程などにもそれぞれ複雑なものがあつた。総括的に言えば、「理蕃政策」が推し進めたのは原住民族の生活近代化であり、その時期の行政文書には「進化」や「進化の程度」といった表現が頻出する。

原住民族に対する近代化政策がどこまで効を奏したのかという問題は、日本の台湾統治全体の評価にかかわる。そして、原住民族自身による原住民族の歴史研究が活発化しつつある昨今の状況において、その問題は彼らの「日本」認識とも深く結びついている。

調査研究にみられる日本人の原住民族観
原住民族地域において展開された行政や調査研究の実態、またそれらが日本人の台湾原住民族観の形成にどのような影響を与えたのか、その結果、日本人統治者と原住民族との間にどのような関係性が取り結ばれたのかについて、実証的に研究が進められた。

原住民族の言語調査がいかなる機関、人物によって立案、計画されたのか、またそのような計画によって組み立てられた調査の内容はいかなるものであつたのかを、領台初期の「蕃語編纂方針」や調査者が「対訳教本」と名づけた大正期の言語調査票を例に検討している。また原住民族のための教科書を編纂した学者が植民地統治といかに関わつたのかを検討することで、日本の植民地主義と人文系の学問との関係(共犯、拒絶、無視などを含む)を明らかにした。

原住民族の流動的「日本」認識

統治初期の原住民族の「日本」認識について、サイシャット族の抗日事件である南庄事件・北埔事件のリーダーに注目して分析が行われた。

かれらは、当初、日本植民地政府にとって「親日的な」有力者と評価されていたが、突然反旗を翻したのであり、植民地政府関係者にとっては、不可解な事件といえよう。しかし、植民統治初期の為政者は、事件の実際の背景の把握に努め、その上で取られた施策は、サイシャットの子孫の日本認識からも見て取れるように、効を奏したように見える。従来統治とは異質の外來統治に直面した原住民族のリーダーは、未知の状況のなかで、必死に日本像(日本政府や日本文化を含む)を模

索し、存亡を賭け行動していた。とくに最初のうち、清朝統治の経験の根柢にしていたが故の読み違いが悲劇の一因ともなっていた。また統治者側の原住民族に対する認識も、その立場、経験に基づき多様であり、未知の状況をいかに正確に把握し対応すべきかを模索していた。このような初期の段階での「日本」認識は、多様で流動的であつた。

(4) 台湾と中華

台湾における「日本」を考えることをテーマとした本科学研究ではあつたが、あまりにも「日本」を強調して台湾をみることは戒めなければならないという共通認識がメンバーの中にもうまれてきた。台湾を「日本」からみるだけでは、その姿をいびつに捉えてしまうという危惧である。そこで、2006年度には、台湾社会を理解するための、中華(中国)認識の重要性について研究会で論議を行った。そして、台湾、日本、中華(中国)という三者関係の中で深められていく「日本」認識を捉えることの必要性について、共通理解が生まれた。2007年度においては、それぞれの研究テーマに「中華」の視点を入れて調査・研究が行われたが、特に、中華・中国との問題について示唆的な指摘がみられるのは、以下の研究である。

中国と対峙するための「日本」の利活用

現在の台湾社会において、人々の文化的、政治的アイデンティティにおいて重要な存在は「中国」であり、論点は中国との統一、文化的統一性である。そのような中において、日本植民地支配のもの(日本語や当時の建築物、日本支配の経験など)は、「中国」とは異なる側面を台湾の人々が主張されるときに利用される。さらに、それらの存在は常に日本的なものとして存在するのではなく、台湾の人々によって日本色がある時には着けられ、ある時には脱色されている。

このような状況は、台湾社会が日本の植民地支配の影響を受けているか否かという議論を超えて、「日本」を他の諸外国と同様に扱うようになりつつあることを意味している。台湾社会を、脱植民地主義化した存在として考える必要が生じているが論じられた。

台北故宮と「中華」の距離

国立故宮博物院は、台湾における「中華」の象徴であり、故宮がいかに位置づけられるかは、台湾において「中華」がいかに価値づけられるかを示している。

国立故宮博物館組織法(2008年)の故宮によって作られた原案は、大陸における歴史的経過や「古」いものを管理するという記述が欠如していたが、これは「脱中国化」として批判され、修正されることになった。

また、2007年に完成した本館のリニューアルには、故宮の姿勢が表れている。故宮は、

過去を語る場所から、参観者に答える現代博物館となった。また、展示配置は、ジャンル別から時代別となり、中国の歴史の流れと文化の変容を示すものへ変わった。さらに、故宮南院の構想が打ち出され、アジアの文脈において、中国の皇帝コレクションと台湾とを位置づけ直すことが計画された。

こうした故宮の動きは、従来の故宮の文物の意義や価値を否定することでは決してなく、多文化社会としての台湾を形成する重要な一要素として故宮の文物を位置づけ、新たな文化を創造していくことを目指すものである。博物館に求められるのは、接するものによって異なる様態をみせる流動的な「中華」であり、それがいかに内在化されていくかが問題になることが指摘されている。

郷紳層の「日本」認識

台湾に定着していた郷紳層の「日本」認識に関する資料も注目すべき視点を提供している。彼らは、大陸社会、文化との比較の視点を、すでに日本統治開始以来持っていた。一部の者は、太平洋戦争前、すでに台湾と大陸との差異を明確に認識し、光復後の国民党政府および外省人の行動様式を予見していた。こうした台湾における中華の伝統を自らのものとし、故郷のそれと対比しながら冷静に日本を観察していた人たちの存在も、台湾を考察する際に等閑視できない。

(5) 植民地主義と「日本」認識をめぐる比較研究

本科研では、台湾の植民地主義の特徴を明らかにするため、他の地域との比較を研究会において行って来た。さらに、朝鮮半島の植民地主義との比較のため、崔吉城が研究代表者となっている科研「朝鮮半島南部の移住漁村『日本村』に関する調査研究」チームと、2008年7月に韓国プサンにおいて合同シンポジウム「東アジアの植民地主義:文化・技術・移動 日本認識をめぐって」を開催した。「文化」セッションでは博覧会ならびに日本語/日本語教育、「漁業」セッションでは漁撈技術と移民、そして「移動」セッションでは日本人の植民地への移住・引き揚げに関する発表が行われた。

台湾と韓国においては、植民地期に対する人類学・歴史学の研究の論点・概念などが、多面において異なっている。こうした状況の下、二地域を研究するものが一堂に会して論議を行ったことは意義深い。

東アジアで起こった移動の歴史について非文字資料から光が当てられ、また国語教育が植民地でもつ意味の重要性が再確認された。植民地における支配者側住民と被支配者側住民は、一元的状態ではなかったということが明らかになるとともに、植民地や内地での生活体験をいかに記述していくかという問題点

も指摘された。

(6) 今後の展望と課題

本科研の4年間の研究成果を公開するべく、2008年9月にシンポジウム「台湾における植民地主義と「日本」認識 歴史・人類学研究」を開催した。セッション「日常の中に見る「日本」 記憶の語りを中心に」においては、日常についての台湾の人々の語りをもとに、「日本」とは日常生活の世界でどのような意味を持ち得るのかについて報告がなされた。セッション「「理蕃」行政にみられる原住民族観」においては、「近代的」とする「日本」の基準をもって、原住民族をみている官吏や警察官の視点が検討された。セッション「台湾における日本/中華・中国の内部化と外部化」においては、故宮博物院の価値づけ、また古蹟指定から、台湾における中華・台湾・日本の位置づけが論じられた。

ディスカッションにおいては、台湾に持ち込まれた日本の「近代」の再考の必要性、朝鮮半島の「近代化」との比較、台湾における階層と「日本」との関連、台湾の「本土化」(台湾化)における「日本」の意味づけ、そして台湾・日本・中国の三者関係のなかでとらえるべき自己認識と他者認識などの課題が指摘された。また、方法論的にも、歴史学と人類学の共同研究として、データをもとに議論を展開できるような体制を目指していくべきことが提議されている。

以上のような研究の経過を踏まえ、今後は、台湾社会の脱植民地化過程に関する実証的研究が課題となる。人類学と歴史学の研究者が共同して、台湾の人々の「日本」認識および「中華」認識を具体的に明らかにしていく。これは、植民地支配の実態の解明にとどまらず、台湾の人々が抱く自己アイデンティティをめぐる様々な思いを捉えていこうとするものである。また、宗主国であった日本との結びつきを、近代化途上の植民統治という観点から考えていくことを目指している。このために設定した研究内容は、以下のようである。第一は、台湾における植民地統治を「政治的中華」との関連で考察する。第二に、世界的な植民地統治の中での台湾の特色の抽出である。第三には、「民俗的中華」の基盤の上に、日本の「近代」がいかに組み込まれたかを検討する。第四に、少数派のエスニック集団における「日本」と「中華」認識の意義を考察する。第五として、寺廟・文化遺産・博物館などにおける「民俗的中華」・「政治的中華」と「日本」の表象の研究である。

歴史学と人類学の共同をより進め、また台湾と他地域との比較を通じて、日本の植民地主義を考える新たな試みを目指すものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計35件)

植野弘子、「台南文化上所受の日本統治の影響：研究高等女学校教育對台湾生活文化之意義」林玉茹・Fiorell Allio 主編『南瀛歴史、社会與文化』(台南県政府) 409-429頁、2008年、査読有

上水流久彦、「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」、『アジア社会文化研究』8、1-26頁、2007年、査読有

西村一之、「台湾東海岸における漢人・アミ漁民と沖縄漁民の接触 植民統治末期から戦後初期を中心に」崔吉城・原田環編『植民地の朝鮮と台湾』(第一書房) 47-82頁、2007年、査読無

笠原政治、「ツァリセンか、パイワンか、ルカイか？ 台湾原住民の民族分類をめぐる一問題」葉春栄(主編)『歴史・文化與族群：台湾原住民国際研討会論文集』(順益台湾原住民博物館) 333-351頁、2006年、査読有

松金公正、「臨濟宗妙心寺派訪台団(1965年)に対する監視報告 中華民國政府の日本仏教へのまなざしに関する一考察」佐藤東洋士・李恩民編『東アジア共同体の可能性 日中関係の再検討』(御茶の水書房) 133-154頁、2006年、査読無

三尾裕子、「植民地下の「グレーゾーン」における「異質化の語り」の可能性 『民俗台湾』を例に」、『アジア・アフリカ言語文化研究』71、161-203頁、2006年、査読有

堀江俊一、「二つの「日本」 客家民系を中心とする台湾人の「日本」意識」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における<日本> 植民地経験の連続・変貌・利用』(風響社) 2006年、97-124頁、査読無

〔学会発表〕(計15件)

上水流久彦、「台湾東部と沖縄先島諸島にみる越境現象」日本文化人類学会第42回研究大会、2008年6月1日、京都大学

三尾裕子、「台湾研究、この十年、これからの十年：社会」日本台湾学会十周年記念シンポジウム、2008年5月31日、東京大学

上水流久彦、「台湾植民地統治期の訃聞主として親族研究の視点から」日本文化人類学会第40回研究大会、2007年6月3日、名古屋大学

〔図書〕(計4件)

S. コルキユフ(上水流久彦・西村一之訳)『台湾外省人の現在 変容する国家

とそのアイデンティティ』風響社、2008年、261頁

末成道男、『台湾阿美族之社会組織及其变化：從招贅婚到嫁娶婚』台北：中央研究院民族学研究所、2007年、415頁

五十嵐真子・三尾裕子編、『戦後台湾における<日本> 植民地経験の連続・変貌・利用』風響社、2006年、336頁

五十嵐真子、『現代台湾宗教の諸相』人文書院、2006年、248頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

植野 弘子 (UENO HIROKO)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：40183016

(2)研究分担者

末成 道男 (SUENARI MICHIO)

東洋大学・

アジア文化研究所・客員研究員

研究者番号：20054570

笠原 政治 (KASAHARA MASAHARU)

横浜国立大学・名誉教授

研究者番号：70130747

三尾 裕子 (MIO YUKO)

東京外国語大学・

アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：20195192

五十嵐 真子 (IGARASHI MASAKO)

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：50330410

堀江 俊一 (HORIE SHUNICHI)

中京女子大学・人文学部・教授

研究者番号：50190244

松金 公正 (MATSUKANE KIMIMASA)

宇都宮大学・国際学部・准教授

研究者番号：50334074

上水流 久彦 (KAMIZURU HISAHIKO)

県立広島大学・生命環境学部・助教

研究者番号：50364101

西村 一之 (NISHIMURA KAZUYUKI)

日本女子大学・人間社会学部・助教

研究者番号：70328889

(3)研究協力者

黄 智慧 (HUANG CHIH HUEI)

台湾・中央研究院民族学研究所・

助理研究員